

「西の湖での外来魚駆除によるホンモロコの回復」

亀甲武志（滋賀県庁水産課）

ホンモロコは琵琶湖固有のコイ科魚類であり、琵琶湖の重要な水産資源である。琵琶湖の沖合から産卵のために接岸してくるホンモロコを対象としたホンモロコ釣りは琵琶湖の春の風物詩であった。しかし、外来魚による捕食や人為的な水位操作による産着卵の干出などにより、近年の漁獲量は10数トンと激減している。従って、琵琶湖のホンモロコの回復は喫緊の課題となっている。

ホンモロコは稚魚期以降は琵琶湖の沖合で生息するが、産卵は琵琶湖や内湖の沿岸のヤナギの根やヨシ帯で行うことから、琵琶湖・内湖回遊型の生活史を送ると考えられている（細谷，2005）。琵琶湖の沿岸に存在する小規模な水域である内湖は、琵琶湖に生息するホンモロコ等のコイ科魚類の産卵場所や仔稚魚の成育場所として利用されていた。しかし、多くの内湖ではオオクチバスやブルーギルが優占し、ホンモロコの琵琶湖から内湖への産卵回遊が見られなくなっている。そこで琵琶湖でのホンモロコ資源の回復を目的として、琵琶湖最大の内湖である西の湖において電気ショッカーボート等による外来魚駆除と水田を活用したホンモロコの種苗生産放流に取り組んだ事業の成果を報告する。

電気ショッカーボートによる外来魚駆除は、2011年から地元漁協の協力を得て取り組んだ。また地元農業者の協力を得て西の湖周辺の水田にALC標識したホンモロコのふ化仔魚を収容した。約1か月間水田で育成し、中干し時に排水路から流下させて、西の湖に放流した。その後、秋から冬にかけて琵琶湖一円で漁獲されたホンモロコや翌春に琵琶湖や内湖沿岸に産卵のため接岸したホンモロコの耳石を摘出してALC標識の有無を確認した。

電気ショッカーボートによる1時間あたりのオオクチバス駆除量は駆除開始から4年目で半減した。西の湖に放流したホンモロコ稚魚は放流半年後の秋から冬にかけて琵琶湖の北湖全域で採捕された。しかし、産卵期に接岸した個体はほぼすべての個体が西の湖周辺で採捕された。2013年の3月ごろから長命寺川や西の湖周辺では近年見られなかったホンモロコ釣りの遊漁者が見られるようになった。以上のように外来魚駆除と水田を活用した種苗生産放流により、琵琶湖から西の湖へのホンモロコの産卵接岸が確認されるようになった。

今後南湖などでの電気ショッカーボートによる外来魚の集中的な駆除と種苗放流により、琵琶湖のホンモロコの回復につながることを期待される。